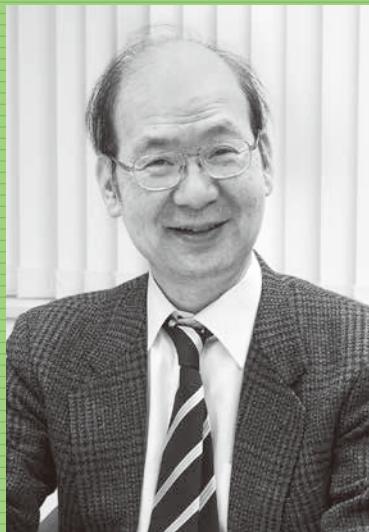


薬剤師さん
に聞く！

私の

くすりのしおり® 活用法



東京慈恵会医科大学附属病院
薬剤部 医学博士
北村 正樹氏

Profile

東京慈恵会医科大学助手を経て、大学附属病院薬剤部にて医薬品情報を担当。主に患者サイドに特化した薬物治療における医薬品（特に抗菌薬など）の費用対効果評価を研究中。

現場で日々患者さんと向き合っている薬剤師の先生方に、「くすりのしおり®」の活用方法をお聞きしました。今回は、東京慈恵会医科大学附属病院薬剤部の北村 正樹氏です。

「くすりのしおり®」の認知拡大に注力を 他ではできない 医薬品全体に向けた活動を評価

——当初、「くすりのしおり®」は内服剤・外用剤しかありませんでしたが、2001年に注射版「くすりのしおり®」を新たに作成するに伴い、専門委員としてアドバイスをいただきました。

以降、長きにわたりご指導をいただいている先生の協議会に対する「当初の印象」と「現在の評価」をお教えてください。

協議会に関与しはじめた当初は、医療従事者としてメーカーと距離を置かなければいけない関係上、「医薬品の業界団体とお付き合いして大丈夫だろうか」という考えを持っていました。ところが、実際に活動に参加してみると非常に自由度が高く、いろいろな活動を行っていることがわかりました。

協議会活動に参加して一番初めに見たのが、一般向けに薬の正しい使い方を説明する小冊子「レーダーカード」でした。1医薬品に限定せず薬全体を扱い、高齢者、妊婦、小児など様々な年代層に向けた資料を作成したり、講演会、勉強会などを積極的に開催するなど、他の団体ではできないことであり、高く評価しています。

——活動を通してお気づきになったことはありますか。

協議会は定期的に多種多様なフィールド調査をし、その結果をふまえて活動して

います。すごいことだと思いますが、活動が進むにつれて「検証はきちんと行っているのか」という部分は気にかかります。

また、私ども医療従事者にとって、メーカーから得られる資材は原則無料です。しかし、無料だからとその資材をおざなりにしてしまうことも否定できません。そのような意味からも、協議会の資材を有効に使って欲しいからこそ、有料にすることを考えはどうでしょうか。

注射版 「くすりのしおり®」 に先見の明

——「くすりのしおり®」の情報の中で足りない部分や要望されるものはどのようなことでしょうか。

患者さんは一人ひとり聞いてくることが違います。それに応えるためには、そのニーズに合った情報を作っていかなければいけません。換言すれば、ベースとなるものがあって、それにわれわれ医療関係者が加工していくことが必要ではないでしょうか。

注射版「くすりのしおり®」を作成する時も、実は「注射剤で薬剤師が必要とする情報などあまりない」と思っていました。というのは、患者さんに詳しく説明し過ぎ

て医師とのコミュニケーションの障害になるのではないかという考え方と、患者さん自身があまり聞いてこないという実情があったからです。しかし現在は、「自分は何を投与されたのか」を聞く患者さんが増えています。在宅での自己注射製剤なども多く認められており、それらを考えると注射版「くすりのしおり®」には先見の明があったのではないかと思っています。

——現在、貴病院で「くすりのしおり®」はどのような使い方をされているのでしょうか。

慈恵医大を含めて「くすりのしおり®」をそのまま使用しているところはほとんど無いと思います。なぜならば、「くすりのしおり®」は1剤1枚ですが、患者さんの多くは多剤服用していることもあり、何枚も渡すことが難しいのです。患者さんに情報提供する量としては、1剤につき、名前、効能・効果、副作用、注意事項の4行分くらいであることから、加工して使っているのが現状です。1剤だけしか飲んでいない方や、新しい薬が処方された時な

どには「くすりのしおり®」を加工して渡すこともあります。

一方、患者さんは入院すると看護師の存在を大きく感じます。しかしながら、看護師は薬の副作用や使用上の注意点などに関しては知りません。医師が一人の患者さんにつきっきりになることはできないので、看護師と薬剤師の連携がとても重要になるのです。

また、在宅になると薬剤師が自分自身で行わなければいけないこともあります。在宅では看護師や介護士の方が活躍していますが、薬剤師がその患者さんや介護する方々の状況に合わせて薬の情報を加工して出せる「くすりのしおり®」は、有効なツールの一つになり得るものと考えています。

すべきことなどがあれば、お教えください。

「くすりのしおり®」の表現をなるべく噛み砕いてほしいですね。

アナフィラキシーを例にしますと、アナフィラキシーショックには血圧低下や顔面蒼白などいろいろな症状があります。「血圧低下」と言ってわかる人ならいいのですが、わからない人にはどうするか。「冷汗が出る」「手が震える」というような前駆症状を伝えてあげなければいけないこともあると思うのです。患者さんにとって理解しやすい表現、薬剤師が噛み砕いて説明する内容を「くすりのしおり®」にも反映してほしいということです。

一方、最近英語版「くすりのしおり®」が急激に増えていますが、外国の患者さんの対応では非常に有用を感じています。外国の方が日本で処方された薬を持ち帰る時や、日本人が旅行や仕事で海外に薬を持参する時にも活用しています。

わが国が観光立国として進んでいくにつれ、英語圏以外の国の方々も日本を訪

「くすりのしおり®」は 患者さんに届ける 正しい情報ツール

——協議会に期待されることや改善

Medication guides(Kusuri-no-Shiori) for 6,373 prescription drugs are available.

くすりのしおり® Kusuri-no-Shiori (Drug Information Sheet)

Supporting companies

Kusuri-no-Shiori (Japanese)

Search for medicines

Product name Active Substance Dosage form Print on wrapping Keywords search

CYMBALTA

Company name All

English version With english version

Advanced Search

Search

英語版「くすりのしおり®」の検索画面
<http://www.rad-ar.or.jp/siori/english/>

れることになります。そのような時、英語版があれば他言語に翻訳するのは難しくないでしょう。更に充実することを期待しています。

薬の説明補助となる絵文字ピクトグラムなども、薬の情報提供をより簡便にできるツールの一つです。日本人は短い英文ならば理解することは容易と思います。しかし、数行にわたる長い文書は難しいので、そのような時にピクトグラム（下記）が役立ちます。協議会が目指す情報提供の対象は大学病院の薬剤師や医療関係者だけではないはずです。保健師さんや旅館の従業員の方にもわかり、使えるようなものを最終的には作り上げてはいかがでしょうか。

最近は、患者さんがインターネットを使い薬の情報を収集しています。薬剤名を検索すれば、関連事項が山のようになります。ただし、情報すべてが正しい情報かと言えばそうではないので、それを専門家であるわれわれが正していかなければいけない。その時、正しい情報ツールとして使えるもの一つが「くすりの

しおり[®]」だと思っていますし、その意味からも「くすりのしおり[®]」を一般の方に広めていかなくてはいけないと考えています。

「小さいころから教育をしていく」ということです。薬学教育も6年制になり、対患者さんのロールプレイングが進みました。薬剤師もそのような意味からすれば、良い方向に進んでいると思います。

良い方向に進んでいる現在だからこそ、協議会にはその良い方向に向かっていろいろな医療の職種の方々と連携して欲しいと思います。対薬剤師もそうですし、対看護師もそうです。未病ということを考えれば対栄養士もいいと思います。多くの職種との橋渡しをしていただきたいと思います。

——読者には病院薬剤師の方も多いのですが、メッセージをお願いします。

薬剤師であれば「くすりのしおり[®]」を一度はみていただきたい。自分自身で読んでみて、「その通りなのか」「違うのか」「改善すること」などを協議会にフィードバックして、薬剤師と患者さんにとって「くすりのしおり[®]」が今以上によりよいものになるよう、ぜひ協力していただきたいと思います。

ピクトグラムとは

一般的に絵文字、絵単語などと呼ばれる視覚記号の一つ。くすりの適正使用協議会では「薬の種類」「使用方法」などを、子どもから高齢者まで誰でも親しみを持って簡単に理解できるようなピクトグラムを作成しています。詳細については協議会事務局までお問い合わせください。

